

ノーベル賞は日常診療に役立つか

日本人はノーベル賞が大好きである。「ノーベル賞の舞台裏」(共同通信ロンドン支局取材班、ちくま新書)によると、ストックホルムでは近年、ノーベル賞授賞式シーズンになると、日本人受賞者を取材する日本のメディアによるお祭り騒ぎが見られるそうだ。ノーベル賞の取材にここまで血道をあげるのは日本だけで、欧米のメディアは自国の研究者が受賞しても、通常ニュースで扱うだけだそうである。ノーベル賞を、オリンピックやサッカーのワールドカップなど同一視し、ノーベル賞がひとつ加わるたびに、国や民族のランクが上がったような陶酔感を味わう日本人のなんと多いことかと、同書は嘆いている。

2018年のノーベル生理学・医学賞が京都大学の本庶佑氏に授与され、彼が開発に携わったニボルマブ(商品名オプジーボ)がとんでもない高価格であることと合わせ、大きく話題になったことも記憶に新しいところだ。ノーベル委員会による本庶氏の授賞理由は「彼(本庶氏)の発見に基づく治療が、癌との闘いにおいて画期的に有効であること」とされている。

その画期的に有効とされたニボルマブの臨床成績を詳細に検討すると(本誌66号79頁 New Products 参照)、「PD-L1が高発現している非小細胞性肺癌ならば、約3か月生存期間を延長する一方PD-L1が低発現の場合には、寿命短縮の可能性はある」ということであつた。これが「画期的に有効」といえるだろうか?

さて、2005年のノーベル生理学・医学賞は、ピロリ菌の発見と胃炎・胃潰瘍との関連の解明に対して、オーストラリアのバリー・マーシャル氏とロビン・ウォーレン氏に与えられた。マーシャル氏自らこの菌を飲み、自分自身に胃炎を起こす実証実験までしたことはよく知られている。胃酸の中で生息できる菌が存在するはずがないという当時の常識を覆したまさに画期的な発見であつた。そのピロリ菌が胃・十二指腸潰瘍の主原因であることもわかってきたし、胃がんと関連も確実となっている。

ただし、ピロリ除菌で胃がんは減っても他の部位のがんや脳卒中が増えて寿命はむしろ短くなる可能性が大きいこともわかってきた。今回のガイドライン批判シリーズでは、ピロリ除菌のこうした害を無視しているガイドラインを批判した。

ところで、北海道、青森県、神奈川県、愛知県、三重県、大阪府、岡山県、佐賀県など、かなりの数の自治体が無料で、中学2年～3年生にピロリ菌検診・除菌を「未来に向けた胃がん対策推進事業」などとして実施している。だが、中学生は医学的には「小児」である。そして、日本小児栄養消化器肝臓学会のガイドラインでは、ピロリ除菌を「行わない」ことを薦めている。

日本ヘリコバクター学会によるピロリ除菌の利点だけに目を奪われた非科学的な事業に公金を使うようなことを行政は即刻中止すべきである。